レ 伯前一〇廿九 詩卅五〇十五、九 箴十七〇五 同十二
詩卅七〇一、七十三〇三 箴三〇十七、廿四〇一
イ 伯十八〇五六、廿一〇十 詩十一〇六
ロ 箴十三〇九、廿七〇廿 箴十三〇七 伯前二〇十七
ハ 箴十七〇十五 申一〇十
ニ 箴十八〇十九 箴十八〇 詩七〇廿
ホ 箴十五〇廿一 詩七〇廿
ヘ 箴十七〇十五 箴十五〇廿三
ト 箴十七〇十五 箴十五〇廿三
チ 箴十七〇十四 太五〇廿五

よりて亡ぶ　汝の仇たふるゝとき樂しむこと勿れ、彼の亡ぶるときこゝろに喜ぶことなかれ　恐らくヨホバこれを見て惡しとしゝの震怒を彼より離れ去めたまへん　おんぢ惡者を怒ることなかれ、邪曲ある者を羨むなかれ　うれ惡者には後の善賚なし、邪曲なる者の燈火は滅されん　わが子よヨホバと王とを畏れよ、叛逆者に交ることなかれ　斯るものらの災禍は速におこる、この兩者の滅亡いたれか知えんや　是等もまた智慧ある者の箴言なり、偏りて、革するは善らず　罪人に告て汝は義しといふものをば衆人これを詛ひ諸民これを惡まん　これを譴る者は恩をえん、また福祉これにきたるべし　ほどよき應答をなす者は口唇に接吻するなり　外にて汝の工をとゝのへ田圃にてこれを自己のためにうなへ然るのち汝の家を建よ　故なく汝の隣に敵して証することなかれ汝なんぞ口唇をもて欺くべけんや　彼の我に爲しゝ如く我も亦かれになすべし、われ人の爲しところに循ひてこれに報いんといふと勿れ　われ曾て惰人の田圃と智慧なき人の葡萄園とをすぎて見しに　荊棘あまねく生え、蕁麻の地面を掩ひ石垣くづれいたり　我これをみて心をとゞめ、これを觀て教を受たり　玄むらく臥し暫らく睡り手を叉きて又玄むらく休む　さらば汝の貧窮は盜人のごとく汝の缺乏は兵士の如くきたるべし

第二十六章　此等もまたソロモンの箴言なり、ユダの王ヒゼキヤに屬せる人々これを輯めたり、事を隱すは神の榮譽なり事を窮むるは王の榮譽なり、天の高さと地の深さと王たる者の心とは測るべからず、銀より渣滓を除け、さらば銀工の用うべき器いでん　王の前より惡者をのゾけ、然らば王の位義によりて堅く立ん、王の前に自から高ぶることなかれ貴人の場に立つことなかを、おんぢが目に見る王の前にて下にさげらるゝよりいこゝに上れといはるゝこと愈をり　汝かろ〳〵しく出て爭ふことなかれ、

ル 箴十三〇十七
ヲ 箴廿〇六
ワ 傳十二
カ 創二〇四 伯上廿五〇廿
ヨ 箴十五〇一、十六〇十
タ 箴廿五〇廿七
レ 伯六〇十八 雛十二〇十五
ソ 出廿三〇四公 太五〇四 十四 雛十二〇廿
ツ 伯廿七〇廿二
子 伯廿七〇廿二
ナ 傳百一〇七
ラ 箴十九〇十三、廿一〇九、ヨ九
ム 箴廿五〇十六 箴廿七〇二
ウ 箴廿七〇二
ヰ 箴十六〇廿二
イ 伯上十二〇十七
ヒ 民廿三〇八 申廿三〇五
ハ 詩廿二〇九 箴十〇十三

恐らく終にいたりて汝の隣に辱しめられん、うの時おんぢ如何になさんとするか、　おんぢ隣と爭ふことあらば只これと爭へ、人の密事を洩すなかれ　恐らくは聞者おんぢを辱しめん、汝うしらをて止さらん　機にかなひて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌たるごの如し、　智慧をもて譴むる者の之をきく者の耳にはいるとは金の耳環と精金の飾のごとし、　忠信なる使者は之を遣す者にはいること穡收の日に冷かなる雪あるがごとし、能うの主の心を喜ばしむ、　ふくりものすと僞りて誇る人は雨なき雲風の如し、　怒を緩くすれば君も言を容る、柔かなる舌は骨を折く、　なんぢ蜜を得るか、惟これを足る程に食へ、恐らくは食ひ過して之を吐出さん、　おんぢの足を隣の家に玄げくするなかれ、恐らくは彼おんぢを厭ひ惡まん、　うの隣に敵して虚僞の証をたつる人は斧刃また利き箭のごとし　難難に遇ふとき忠實ならぬ者を賴むは惡き齒また跛たる足を恃むがごとし、　心の傷める人の前に歌をうたふは寒き日に衣をぬぐが如く、管達のうへに酢を注ぐの如し、　なんぢの仇もし飢ゑば之に糧をくらはせ、もし渴かば之に水を飲ませよ　なんぢ斯するは火をこれが首に積むなり、ヨホバなんぢに報いたまふべし、　北風は雨をおこし、かげごとをいふ舌は人の顏をいからす、　爭ふ婦と偕に室に居らんよりは屋蓋の隅にをるは宜し、　遠き國よりきたる好き消息は渴きたる人にはける冷かなる水のごとし、　義者の惡者の前に服するは井の濁れるがごとく泉の汚れたるがごとし、　蜜をおほく食ふは善らず、人おのれの榮譽をもとむるは榮譽にあらず、　おのれの心を制へざる人は石垣おさ壞れたる城のごとし

第二十六章　一　夢譽の愚なる者に適たざるは夏の時に雪ふり、穡收の時に雨ふるがごとし、　二　故なき詛は雀の翔り燕の飛ぶが如くにきたるものにあらず、　三　馬の爲には策あり、驢馬の爲には銜あり、愚なる者

の背のために杖あり、四愚なる者の痴にまたがひて答ふること勿れ、恐らくはおのれも是と同じからん、五愚なる者の痴に応たゞひて之に答へよ恐らくは彼おのれの目に自らを智者と見ん、六愚なる者に托して事を言おくる者はおのれの足をきり身に害をうく、七跛者の足は用なし、愚なる者の口の箴もかくのごとし、八榮譽を愚なる者に與るは石を投石索に繫ぐが如し、九愚なる者の口にたもつ箴言は醉るもの〳〵刺ある杖を手にて擧るがごとし、十愚なる者を傭ひ、流浪者を傭ふ者はすべての人を傷くる射者の如し、十一狗のかへり來りてその吐たる物を食ふごとく愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ、十二汝おのれの目に自らを智慧ある者とする人を見るか、彼よりも却て愚なる人に望あり、十三惰者は途に獅あり、獨に獅ありといふ、十四戶の蝶鉸によりて轉るごとく惰者はその牀に輾轉す、十五惰者はその手を盤にいるゝも之をその口に擧ることを厭ふ、十六惰者はおのれの目に自らを、善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす、十七路をよぎり自己に關りなき爭擾にたづさはる者は狗の耳をとらふる者のごとし、十八既にその鄰を欺くことをなして我はたゞ戲をしのみといふ者は火箭または鎗または死を擲つ狂人のごとし、十九薪なければ火はきえ、人の是非をいふ者なければ爭端はやむ、二十煨火に炭をつぎ火に薪をくぶるごとく爭端を好む人は爭端を起す、二十一人の是非をいふもの〳〵言ひたぶれのごとしと雖もかへつて腹の奥に入る、二十二温かき口唇をもちて惡き心あるは銀の滓をさせたる瓦片のごとし、二十三恨むる者は口唇をもて自ら飾れども心の裏には虚僞をいだく、二十四彼その聲を和らかにするとも之を信ずるなかれ、その心に七の憎むべき者あれば なり、二十五たとひ虚僞をもてその恨をかくすともその惡は會集の中に顯はる、二十六坑を掘るものは自ら之に陷らん、石を轉しあぐる者は上にはその石まろびかへらん、二十七虚僞の舌はおのれの害する者を憎み、諂ふ口は滅亡をきたらす

イ 路十二〇十九、廿　羅四〇十三
ロ 箴廿五〇廿七
ハ 詩箴三〇十二
ニ 箴廿八〇十三　加二〇十四
ホ 詩百四十一〇五
ヘ 伯六〇七
ト 箴十七〇十七、十八〇廿四
チ 箴十〇一、廿三〇十五、廿四
リ 詩百廿七〇五
ヌ 箴廿二〇三
ル 出廿二〇廿六　箴廿〇十六
ヲ 箴十九〇十三
カ 箴廿〇十六　路二〇五
ワ 詩節九〇七、十三
タ 箴十七〇三
レ 箴廿三〇廿五　樂一〇五
ソ 箴廿六〇十二
ツ 箴廿九〇廿一
ネ 箴廿九〇廿
ナ 羅十八〇十一　羅十二〇十六　歷三〇十七
ラ 箴廿二〇十三
ム 箴十九〇廿四
ウ 箴十九〇廿四
ヰ 詩後二〇廿二
ノ 箴五〇四
オ 箴廿二〇十
ク 箴十五〇十八、廿九〇廿二
ヤ 箴十八〇八
マ 詩五〇三　耶九〇八
ケ 詩七〇十五、十六、九〇十
フ 詩廿八〇三
コ 詩七〇二、五十七〇六　箴廿八〇十　傳十〇八

第二十七章

一 あんぢ明日のことを誇るおかれ、汝は一日の生ずるところの如何なるを知ざれば なり、二汝おのれの口をもて自から讃ることをおく、人をして己を讃めしめよ、自己の口唇をもてせず、他人を去て己をほめしめよ、三石は重く、沙は輕からず、然ど愚なる者の怒はこの二よりも重し、四忿怒は猛く憤恨は烈し、されど嫉妬の前には誰か立ことを之え、五明白に譴むるは秘に愛するに愈る、六愛する者の傷つくるは眞實よりし、敵の接吻するは僞詐よりするなり、七飽るものは蜂の蜜をも蹂つく、されど飢たる者には苦き物さへもすべて甘し、八その家を離れてさまよふ人はその巣を離れてさまよふ鳥のごとし、九膏と香とは人の心をよろこばすなり、心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のごとし、十汝の父の友とおのれの友とを棄るなかれ、なんぢ患難にあふ日に兄弟の家にいることなかれ、親しき隣は疏き兄弟に愈きり、十一わが子よ智慧を得てわが心を悅ばせよ、然は我をそしる者に我こたふることを得ん、十二賢者は禍害を見てみづから避け、拙者はすゝみて罰をうく、十三人の保証をなす者はよりも先その衣をとれ、他人の保証をなす者をは固くこらへよ、十四晨とやく起て大聲にその鄰を祝すれば却て咒詛と見なされん、十五相爭ふ婦は雨ふる日に絶ずある雨漏のごとし、十六これを制ふるものは風をおさふるがごとく、右の手は膏をつかむがごとし、十七鐵は鐵をとぐ、斯のごとくその友の面を研なり、十八無花果の樹をまもる者はその果をくらふ主を貴ぶものは譽を得、十九水に照せば面と面と相肖るごとく人の心は人の心に似たり、二十陰府と沈淪とは飽ことなく、人の目もまた飽ことなし、二十一坩堝によりて銀をためし、爐によりて金をためし、その讃らるゝ所によりて人をためす、二十二あんぢ愚なる者を臼にいれ杵をもて麥と偕にてをを搗ともその愚は去

ざるあり、○ 二三 あんぢの羊の情況をよく知り、なんぢの群に心を留めよ、二四 富い永く保つものにあらずいかで位い世々にたもたん、二五 艸枯れ苗いで山の蔬菜あつめらる、二六 羔羊いなんぢの衣服を出し牡羊い田圃を買ふ價となり、二七 牝羊の乳いおほくして汝となんぢの家人の糧となり、汝の女をやしなふにたる

第二十九章

一 惡者い逐ふ者なけれども逃げ義者い獅子のごとくに勇まし、二 國の罪によりて侯伯多くなり、智くして知識ある人によりて國い長く保つ、三 弱者を虐ぐる貧人い糧をのこさぐる暴しき雨のごとし、四 律法を棄るもの い惡者をほめ、律法を守る者いこれに敵す、五 惡人い義きことを覺らず、ヱホバを求る者い凡の事をさとる、六 義しくあゆむ貧者い曲れる路をあゆむ富者に愈る、七 律法を守る者い智子なり、放蕩なる者に交るものい父を辱かしむ、八 利息と高利とをもてうの財産を增すものい貧人をめぐむ者のために之をたくさんふるあり、九 耳をうむけて律法を聞ざる者いうの祈すらも憎まる、十 義者を惡き道に惑むす者いみづから自己の阱に陷らん、されど質直なる者い福祉をつぐべし、十一 富者いふのれの目に自らを智慧ある者となす、されど聰明ある貧者い彼をさかり知る、十二 義者の喜ぶとき大なる榮あり、惡者の立るとき民身を匿す、十三 うの罪を隱すものい榮ゆることなし、然ど認らさして之を離るゝ者い憐憫をうけん、十四 恒に畏るゝ人い幸福なり、うの心を剛愎にする者い災禍に陷るべし、十五 貧しき民を治むるあしき侯伯い吼る獅子あるひい飢たる熊のごとし、十六 智からざる君さおほく暴虐をおこなふ、不義の利を惡む者い遐齡をうべし、十七 人を殺してうの血を心に負ふ者い墓に奔るあり、人これを阻むること勿れ、十八 義く行む者い救を受、曲れる路に行む者い直に跌れん、十九 ふのれの田地を耕す者い糧にあき、放蕩なる者に從ふものい貧乏に飽く、二十 忠信ある人いふ冨くの幸福を受、速かに富を得んとする者い罪を免れず、二一 人を偏視

ソ 詩百四〇十四
イ 利世六〇十七、世六、詩五十三〇五
ロ 太十八〇世八
ハ 詩十〇三、四十九〇十八
ニ 羅一〇世一、王上十八〇十八、世一、太三〇七、十四〇四、箴五〇十一、十四〇六
ホ 詩九十二〇六
ヘ 約七〇十七、哥前二〇十五
ト 約壓二〇廿、廿七
チ 羅十九〇三、廿八〇十八
リ 伯廿七〇十六、十七、羅十三〇世二、傳二〇廿六
ヌ 羅七〇十一
ル 詩六十六〇十八、百九〇七
ヲ 羅十五〇八
ワ 太六〇世三
カ 羅十一〇十、廿九〇二、世八〇世八、傳十〇六
ヨ 詩世二〇三、五、約壓一〇八〇十
タ 詩十六〇八、羅世三〇十七
レ 機前五〇八
ソ 出一〇十四、十六、廿三、太二〇十六
ツ 創九〇六、出世一〇十四
ネ 羅十〇九、廿八〇世五
ラ 羅廿八〇六
ム 羅十二〇十一
ウ 羅十三〇十一、世〇世一、世三〇四、廿八〇世二、箴前六〇九
ヰ 羅十八〇五、廿四〇世三

ノ 結十三〇十九
オ 羅廿八〇世
ク 羅廿七〇五、六
ヤ 羅十八〇九
マ 羅十三〇十
ケ 提前六〇六
フ 申十五〇七、七、廿二〇九、羅十九〇十七、廿二〇九
コ 羅廿八〇十四、廿九〇二
エ 伯廿四〇四
イ 母上二〇世五、代下卅六〇十六、羅一〇十四、五、廿七
ロ 結八〇十五、羅十一〇十、廿八〇十二、廿八
ハ 結三〇十五
ニ 羅十〇一、十五〇廿、十七
ホ 羅五〇九、十、六〇廿六、廿八〇七
ヘ 伯廿九〇十六、卅一〇十三
ト 羅十二〇十一
チ 詩廿二〇世
リ 太十一〇十七
ヌ 詩七十二〇卅
ル 羅十二〇十
ヲ 羅十一〇十、十九、十二〇
カ 詩七十二〇十五
ヨ 羅廿〇世八、廿五〇五
タ 羅廿九〇十七
レ 羅十〇一、十七〇廿一、廿五
ソ 詩卅七〇卅六、五十八〇十一
ツ 羅十二、十四、十九〇十八、廿二〇十五、廿三〇十子
ネ 母上三〇一、厥八〇十一、約十三〇十七、雅一〇廿五
ラ 羅十一〇十
ム 羅十七〇十七
ウ 太十一〇十七
ヰ 詩十二〇十一
ノ 羅十一〇十一
ク 羅十二〇十一
ヤ 羅十二〇十四、十九〇十八、廿二〇十五、廿三〇十
マ 羅十二〇十四、十九〇十五、廿三〇十
ケ 羅十二〇十四、十九〇十八、廿二〇十一、十九、十一〇八、九十二〇
フ 羅十二〇十一
コ 羅十二〇十一
エ 羅十二〇十一
イ 羅十二〇十一
ロ 羅十二〇十一
ハ 羅十二〇十一
ニ 羅十二〇十一
ホ 羅十二〇十一
ヘ 羅十二〇十一
ト 羅十二〇十一
チ 羅十二〇十一
リ 羅十二〇十一
ヌ 羅十二〇十一
ル 羅十二〇十一
ヲ 羅十二〇十一
カ 羅十二〇十一
ヨ 羅十二〇十一
タ 羅十二〇十一
レ 羅十二〇十一
ソ 羅十二〇十一
ツ 羅十二〇十一
ネ 羅十二〇十一
ラ 羅十二〇十一
ム 羅十二〇十一
ウ 羅十二〇十一
ヰ 羅十二〇十一

るいよからず、人いたゞ一片のパンのために德を犯すなり、二二 惡目をもつ者い財をえんとて急ごむしく、却て貧窮のおのれに來るを知らず、二三 人を譴むる者い舌をもて諂ふ者よりも大なる感謝をうく、二四 父母の物を竊みて罪ならずといふ者い滅す者の友なり、二五 心に貪る者い爭端を起し ホバに倚賴むものい豐饒になるべし、二六 ふのれの心を恃む者い愚なり、智慧をもて行む者い救を受ん、二七 貧者に賜ずものい乏しからず、うの目を掩ふ者い詛を受ること多し、二八 惡者の起るとき人匿れ、うの滅るとき義者ます

第二十九章

一 去むゝ〳〵責られてもおほ强項ある者い救さるゝことなくして猝然に滅されん、二 義者ます せば民よろこび、惡きもの權を掌らば民かなしむ、三 智慧を愛する人いうの父を悅ばせ妓婦に交る者いうの財産を費す、四 王い公義をもて國を堅うす、されど租稅を征取る者いてきを滅ぼす、五 うの隣に諂らふ者いかれの脚の前に網を張る、六 惡き人の罪の中にい罟あり、然ど義者い歡び樂しむ、七 義きものい貧きもの〻訟をかへりみる、然ど惡人い之を知ることを願はず、八 嘲笑人い城邑を擾し、知慧ある者い怒を去づむ、九 智慧ある人おろかある人と爭へば或い怒り或い笑ひて休むことなし、十 血をなゞす人い直き人を惡む、されど義き者いうの生命を救むんことを求む、十一 愚なる者いうの怒をことゞく露さし、智慧ある者い之を心ゐ瀛む、十二 君王もし虛僞の言を聽ばうの臣みな惡し、十三 貧者と苛酷者と偕に世にをる、ヱホバい彼等の目に光をあたへたまふ、十四 眞實をもて弱者を審判する王いうの位つねに堅く立つべし、十五 鞭と譴責とい智慧をあたふ、任意におしおかまたる子いうの母を辱しむ、十六 惡きもの多けゝば罪も亦おほし、義者い彼等の傾覆をみん○ 十七 なんぢの子を懲せ、さらば汝あんぢを安からしめ、又なんぢの心に喜樂を與へん、十八 默示なければ民い放肆にす、律法を守るものい福ひなり、十九 僕い言をもて譴むるとも改めず、彼い知

ラ 箴廿六〇十二
ム 箴十五〇十八、廿六〇廿一
ウ 伯廿二〇廿九、箴十五〇廿一、伯廿二〇廿一、賽六十六〇廿二、但四〇廿一、路廿一、太廿三〇十二、路十四〇十八〇十四、徒十二〇廿三、羅四〇六、十、使前五〇五
ヰ 利五〇一
ノ 創十二〇十二、廿〇二、十
オ 詩廿〇九、箴十九〇六

ども從ざるを心なり、二十 あんぢ言を謹まざる人を見しや、彼よりも却て愚かなる者に望あり、二一 僕をうの幼なき時より柔かに育ておゝ終にゝ子の如くおらしめん、二二 怒る人ゝ爭端を起し、慣はる人ゝ罪ふかし、二三 人の傲慢ゝふかるを臭くし、心に誇だる者ゝ榮譽を得、二四 盜人に黨する者ゝおのれの靈魂を惡むあり、彼ゝ誓を聽けども說述ず、二五 人を畏るゝゝ罠にあちいる、ヱホバをたのむ者ゝ護られん、二六 君の慈悲を求る者ゝおほし、然れど人の事を定むるゝヱホバによる、二七 不義をなす人ゝ義者の惡むところ、義くあゆむ人ゝ惡者の惡むところなり

第三十章

一 ヤケの子アグルの語なる箴言、かれイテエルにむかひて之をいへり、即ちイテエルとウカルとにいへる所のものあり、二 我ゝ人よりも愚なり、我にゝ人の聰明あらず、三 我いまだ智慧をならひ得ず、またいまだ至聖ものを曉ることをゝず、四 天に昇りまた降りし者ゝ誰か風をうの掌中に聚めし者ゝ誰か水を衣につゝみし者ゝ誰か、地のすべての限界を定めし者ゝ誰か、うの名ゝ何ぞ、うの子の名ゝ何ぞ、汝これを知るゝ○ 五 神の言ゝみな潔よし、神ゝ彼を賴むものゝ盾なり、六 汝うの言に加ふること勿れ、恐くゝ彼なんぢをせめ、又あんぢを謊る者となしたまむん○ 七 われ二の事をあんぢに求めたり、我が死ざる先にこれをたまへ、八 即ち虛假と謊言とを我より離きしめ、我を去て貧から去めずまた富しめず惟なくてならぬ糧をわたへ給へ、九 うゝ我あきて神を知ずといひヱホバゝ誰なりやといむんことを恐き、また貧くして竊盜をなし我ゞ神の名を汚さんことを恐るゝゝあり○ 十 あんぢ僕をうの主に讒ることなかれ、恐くゝ彼あんぢを詛ひてあんぢ罪せられん○ 十一 うの父を詛ひうの母を祝せざる世類あり、十二 おのれの目に自からを潔者となして尙うの汚穢を滌れざる世類あり、十三 また一の世類あり、嗚呼うの眼ゝいかゝ高きゞや、うの瞼ゝ

伯廿九〇十七、詩五十二〇二、五十七〇四、箴十二〇十八
ワ 詩十四〇四、歷八〇四
カ 箴廿七〇廿、詩二〇五
ヨ 創九〇廿二、利廿〇九、箴廿〇廿、廿三〇廿二

昇れり 十四 うの齒ゝ劍のごとく、うの牙ゝ刃のごとき世類あり、彼等ゝ貧き者を地より呑み、窮乏者を人の中より食ふ、○ 十五 蛭に二人の女あり、與へよ〳〵と呼はる、飽ことを知ざるもの三あり、否な四あり皆たをりといむず、十六 即ち陰府雍まざる胎、水に滿ざまざる地、星りといむざる火これあり、○ 十七 おのれの父を嘲り母に從ふことをいやしとする眼ゝ谷の鴉これを拔いだし、鷲の雛これを食むん○ 十八 わが奇とするもの三あり、否な四あり共にわゞ識ざる者なり、十九 即ち空ゆとぶ鷲の路、磐の上にはふ蛇の路、海にはしる舟の路、男の女にあふの路これなり、二十 淫婦の途も亦去かり、彼ゝ食ひてうの口を拭ひ、わを惡きことを爲ざりきといふ○ 二一 地ゝ三の者によりて震ふ、否な四の者ゆよりて耐ることあたはざるあり、二二 即ち僕たるもの王となるゆ因り、愚なるもの糧に飽るにより、二三 厭忌きたる婦の嫁ぐにより、婢女うの主母に續に因りてなり○ 二四 地に四の物あり、微小といへども最智し、二五 蟻ゝ力あき者なれどもうの糧を夏のうちに備ふ、二六 山鼠ゝ强からざるどもうの室を磐につくる、二七 蝗ゝ王なけれどもみな隊を立ていづ、二八 守宮ゝ手をもてつかまり王の宮にをる○ 二九 善あゆむもの三あり、否な四あり皆よく歩く、三十 獸の中にて最も强くもろ〳〵のものゝ前より退かざる獅子、三一 腹帶せし戰馬、牡野羊、及び當ること能はざる王これなり○ 三二 汝もし愚にして自から高ぶり或ゝ惡きことを計らゞ汝の手を口に當べし、三三 うれ乳を搾れゞ乾酪いで、鼻を搾れゞ血いで怒を激ふれゞ爭端おこる

第三十一章

一 レムエル王のことゞ即ちうの母の彼に教へし箴言なり、二 わが子よ何を言んか、わが胎の子よ何をいむんか我が願ひて得たる子よ何をいむんか、三 なんぢの力を女についやすなかれ、王を滅すものに汝の途をまかする勿れ、四 レムエルよ酒を飲ゝ王の爲べき事に非ず、王の爲べき事にあらず、醇醪

イ 箴廿〇一
ロ 詩七十三〇廿二
ハ 創三〇十三、伯廿八〇四、詩百四〇三、賽四十〇十二
ホ 詩十二〇六、十八〇世、十九〇八、百十九〇百四十、
ヘ 詩十八〇世、八十四〇十、一百十五、九十十一
ト 申四〇二十二〇廿二、賽廿二〇十八、十九
チ 太六〇十一
リ 申八〇十二、十四、十七、廿一〇廿、廿二〇十五、尼九〇廿五、廿六、伯廿一〇廿四、十五、廿八、何十三〇六
ヌ 路十八〇十一
ル 詩百廿一〇一、箴六〇十七

ヲ 箴十九〇十七、伯廿一〇一、詩百四〇十八
ワ 箴廿一〇十
カ 箴廿一〇十
ヨ 箴十九〇十、傳十〇七
レ 箴六〇六
ソ 詩百四〇十八
ツ 伯廿一〇五、四十〇四、八〇三、來七〇十六、傳
イ 箴廿〇一
ロ 賽四十九〇十五
ハ 箴五〇九
ニ 申十七〇十七、尼十三〇廿六、箴七〇廿六、何四〇十一
ホ 傳十〇十七

を求るい牧伯の爲すべき事にあらず、恐らくい酒を飲て律法をわすれ、且すべて惱まさるゝ者の審判を枉げん　六 醇醪を亡びんとする者にあたへ、酒を心の傷める者にあたへよ　七 かれ飲てうの貧窮をわすれ、復うの苦楚を憶むざるべし　八 なんぢ瘖者のため又すべての孤者の訟のために口をひらけ　九 なんぢ口をひらきて義き審判をなし、貧者と窮乏者の訟を糺せ○　十 誰か賢き女を見出すことを得ん、うの價い眞珠よりも貴とし、十一 うの夫の心いかをを恃み、うの產業い乏しくならじ　十二 かをが存命ふる間いうの夫に善事をなして惡き事をなさず　十三 彼い羊の毛と麻とを求め、喜びて手から操き　十四 商賈の舟のごとく遠き國よりうの糧を運び　十五 夜のあけぬ先に起てうの家人に糧をあたへ、うの嬪女に日用の分をあたふ　十六 田畝をはかりて之を買ひうの手の操作をもて葡萄園を植ゑ　十七 力をもて腰に帶し、うの手を強くす　十八 彼いうの利潤の益あるを知るうの燈火い終夜きえず　十九 かれ手を紡線車にのべ、うの指に紡錘をとり　二十 手を貧者にのべ、手を困苦者に舒ぶ　二一 彼い家人の爲に雪をおそれず、蓋うの家人みな蕃紅の衣をきをゝなり　二二 彼いおのれの爲に美しき褥子をつくり、細布と紫とをもてうの衣とせり　二三 うの夫いうの地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知るゝなり　二四 彼い細布の衣を製てこれをうり、帶をつくりて商賈にあたふ　二五 彼い筋力と尊貴とを衣とし且のちの日を笑ふ　二六 彼い口を啓きて智慧をのぶ、仁愛の敎誨うの舌にあり　二七 かをいうの家の事を鑒み怠惰の糧を食むず　二八 うの衆子い起て彼を祝す、うの夫も彼を讚ていふ　二九 賢く事をなす女子い多けれども汝いすべての女子に愈れり　三十 艶麗いいつはりあり、美色い呼吸のごとし、惟ヱホバを畏るゝ女い譽られん　三一 うの手の操作の果をこをにあたへ、うの行爲によりてこれを邑の門にほめよ

箴言　終

傳道之書

第一章

一　ダビデの子ヱルサレムの王傳道者の言　二 傳道者言く空の空、空の空なる哉都て空あり　三 日の下に人の勞して爲ところの諸の動作いうの身わ何の益かあらん　四 世い去り世い來る地い永久わ長存なり　五 日い出で日い入りまたうの出し處に喘ぎゆくなり　六 風い南に行き又轉りて北にむかひ旋轉わ施りて行き風復うの旋轉る處にかへる　七 河いみな海に流を入る海い盈ること無し河いうの出きたる處に復還りゆくなり　八 萬の物い勞苦す人これを言つくすあたわず目い見に飽ことなく耳い聞に充ること無し　九 曩に有し者いまた後わあるべし曩に成し事いまた後わ成べし日の下にい新しき者あらざるなり　十 見よ是ゝ新しき者なりと指て言べき物あるや其い我儕の前にありし世々わ既わ久くありたる者なり　十一 已前のものゝ事いこれを記憶ることなし以後のものゝ事もまた後に出る者これをおぼゆることあらじ　十二 わゝ傳道者いヱルサレムにありてイスラエルの王たりき　十三 我心を盡し智慧をもちゐて天ゞの下わ行はるゝ諸の事を尋かつ考覈たり此苦しき事件い神ゞ世の人にさづけて之わ身を勞せしめたまふ者なり　十四 我日の下わ作ところの諸の行爲を見たり嗚呼皆空わして風を捕ふるごとし　十五 曲れる者い直からゝむるあたわず缺たる者い數をあたわずあたわず　十六 我心の中わ語りて言ふ嗚呼我い大なる者となれり我より先わヱルサレムにをりしすべての者よりも我い多の智慧を得たり我心い智慧と知識を多く得たり　十七 我心を盡して智慧を知んとし狂妄と愚癡を知んとしたりしゞ是も亦風を捕るごとくなるを曉れり　十八 夫智慧多ければ憤激多し知識を增す者い憂患を增す

第二章

一 我わゞの心に言けらく來れ我試に汝をよろこばせんとす汝逸樂をきはめよと嗚呼是もまた空

イ 傳一〇十二、七〇廿七、十二〇八至十九、六、六、十二〇　ロ 詩卅九〇五、六、六、十二〇九、百四十四〇四　傳十二〇八　ハ 羅八〇廿　ニ 傳二〇廿二、三〇九　ホ 詩百四〇五、百十九〇九十　ヘ 詩十九〇五、六、詩三〇八　ト 詩百四〇八、九　チ 伯卅八〇十　詩百四〇八、九　リ 箴廿七〇廿　ヌ 傳三〇十五　ル 傳一〇一　ヲ 傳七〇十三　ワ 羅十二〇十一　カ 路十二〇四十二　ヨ 傳二〇二、十二、七〇廿三、廿五　タ 傳十二〇十二　レ 路十二〇十九　ロ 箴五十〇十二　ヘ 何四〇十一　ト 詩百四〇十五　チ 伯廿九〇十五、十六　リ 得廿十九〇四　帆四〇十八　ヌ 利十九〇十五　ル 伯廿九〇十二　甲一〇十六　乙一〇十七　ヲ 羅十二〇十六　カ 路十二〇四、十八〇廿二、十九〇十四　ヨ 申四〇廿八　來十三〇十六　タ 箴十二〇四　ヱ 詩百四〇廿八、九

ハ 箴十四〇十三　傳七〇六
ニ 傳一〇十七

ホ 王上九〇廿八、十〇十、十四、廿一
ヘ 傳一〇十六

ト 傳三〇廿二、九〇十八、九〇九
チ 傳一〇三、十四
リ 傳一〇十七、七〇廿五
ヌ 箴十七〇廿四　傳八〇一
ル 詩四十九〇十　傳九〇二、三、十一

なりき　二我笑を論ふ是い狂なり快樂を論ふ是何の爲ところあらんやと　三我心に智慧を懷きて居つゝ酒を
もて肉身を肥さんと試みたり又世の人い天ゲ下において生涯如何ある事をおさゞ善らんかを知んために
我い愚なる事を行ふことをせり　四我い大なる事業をなせりゝいわゞ爲に家を建て葡萄園を設け　五園をつ
くり圃をつくり又菓のなる諸の樹を其處ゝ植ゑ　六また水の塘池をつくりて樹木の生茂きる林に其より水
を灌ゲ之めたり　七我い僕婢を買得たりまた家の子あり我いゝた見て我より前ゝエルサレムゝをりし者よ
りも衆多の牛羊を有り　八我い金銀を積み王等と國々の財寶を積あげたりまた歌詠之男女を得世の人の樂
なる妻妾を多く之たり　九斯我い大なる者となり我より前にエルサレムゝをりし諸の人よりも大になりぬ
吾智慧もまたわゞ身を離れざりき　十凡うゆゞ目の好む者い我これを禁せず凡うわゞ心は悅ぶ者い我これ
を禁せざりき即ち我いわゞ諸の勞苦によりて快樂を得たり是い我ゞ諸の勞苦ゝよりて得たるところの分
なり　十一我わゞ手にて爲たる諸の事業ゝおよび我ゞ勞して事を爲たる勞苦を顧みるゝ若空にして風を捕ふる
ゞ如くなりき日の下にい益となる者あらざるなり　十二我また身を轉らして智慧と狂妄と愚癡とを觀たり抑
王に繼ゲ之ところの人い如何ある事を爲うるやうの既になせしところの事に過ざるべし　十三光明の黑暗にま
さるゞおどく智慧い愚癡ゝ勝るなり我これを曉れり　十四智者の目いうの頭ゝあり愚者い黑暗に步む然ど我
之る其みゝ遇ところの事い同一なり　十五我心ゝ謂けらく愚者の遇ふところの事に我もまた遇べけれゞ我な
んゞ智慧のまさる所あらんや我また心に謂う是も亦空なるのみと　十六夫智者も愚者と均く永く世に記念ら
るゝことなし來らん世ゝいたを必皆早く既に忘らるゝなり嗚呼智者の愚者とおなじく死るい是如何なる
事ゞや　十七是に於て我世ゝをゞらふることを厭へり凡うゆゞ日の下ゝ爲ところの事い我ゝ惡く見れゞなり即ち

チ 詩四十九〇十
リ 傳一〇三、三〇九
カ 伯九〇七、十四〇一
ヨ 傳三〇十二、十三、廿二、五
〇十八、八〇十五

タ 伯廿七〇十六、十七　箴廿八〇八
ト 傳一〇十三

皆空ゝして風を捕ふるゞごとし　十八我い日の下ゝわゞ勞して諸の動作をゝしたるを恨む其い我の後を繼ぐ
人ゝこれを遺さゞるを得ざれゞなり　十九其人の智愚い誰かこれを知ん然るにうの人い日の下ゝ我ゞ勞して
爲し智慧をこめて爲たる諸の工作を管理るゝいたらん是また空ゝあり　二十我身をめぐらし日の下ゝわゞ勞し
て爲たる諸の動作のためゝ望を失へり　二一今茲ゝ人ゝあり智慧と知識と才能をもて勞して事をゝさんゝ終ゝ
い之ゞために勞せざる人に一切を遺してうの所有となさしめざるを得ざるゝあり是また空ゝして大に惡し
二二夫人いうの日の下に勞して爲ところの諸の動作ところの心勞によりて何の得ところ有るや　二三うの世にゝあ
る日にい常に憂患ありうの勞苦い苦しうの心い夜の間も安んずることゝあらず是また空ゝあり　二四人の食飲を
ゝしうの勞苦によりて心を樂まゝむるい幸福なる事にゝあらず是もまた神の手より出るなり我これを見る
二五誰かうの食ふところうの歡樂を極むるところに於て我にまさる者ゝあらん　二六神いうの心に適ふ人にい智
慧と知識と喜樂を賜ふ然れども罪を犯す人にい勞苦を賜ひて歛めかつ積ことを爲ゝむ是い其を神の心に
適ふ人に與へたまゝんためゝあり是もまた空にして風を捕ふるゞごとし

第三章

一天ゲ下の萬の事にい期ゝあり萬の事務にい時ゝあり　二生るゝに時ゝあり死るに時ゝあり植るに時ゝあり
植たる者を拔に時ゝあり　三殺すに時ゝあり醫すに時ゝあり毀つに時ゝあり建るに時ゝあり　四泣ゝ時ゝあり笑ふに時ゝあ
り悲むに時ゝあり躍るに時ゝあり　五石を擲つに時ゝあり石を歛るに時ゝあり懷くに時ゝあり懷くことをせざるに時
ゝあり　六得ゝ時ゝあり失ふに時ゝあり保つに時ゝあり棄るに時ゝあり　七裂ゝ時ゝあり縫ゝ時ゝあり默すに時ゝあり語ゝ時
ゝあり　八愛しむに時ゝあり惡むに時ゝあり戰ふに時ゝあり和ぐゝ時ゝあり　九働く者いうの勞して爲ところよりして
何の益を得んや　十我神ゞ世の人にさづけて身をことに勞せしめたまふところの事件を視たり　十一神の爲た